ラーゲリの中のジャズ

―― スターリン体制下のジャズと大衆歌謡（5）――

鈴　木　正　美

ラーゲリの中ではどのような曲が演奏されていたのだろうか。ラーゲリに送られたジャズの音楽家たちはどのような日々を送っていたのだろうか。これまで日本語に翻訳された強制収容所に関する資料では，悲惨な風景しかほとんど描かれていない。また，シベリアに抑留された日本人の手記の中には，収容所に勤務するロシア人女性との恋愛体験が語られたり，気候の穏やかな南ロシアでの牧歌的な農労生活が語られているものもあるが，多くの資料は過酷な収容所生活の描写しかないようである。果たして本当にそうだったのだろうか。

本稿はラーゲリで８年間を過ごしたエディ・ロズネルの生涯を辿り直すことで，ラーゲリ内での音楽生活を垣間見ようという試みである。ロズネルに関しては資料的にはまだ十分ではないために，現時点では研究ノートのレベルでしかないが，ロシア・ジャズ史上の偉人であるロズネルの生きた軌跡を検証してみたい。

ベルリン時代

エディ・ロズネル Эдди Рознер（1910-1976）はソ連時代を代表するトランペットの名手で，欧米や日本ではエディ・ロズナー Eddie Rosner として多くのジャズ・ファンに知られている。(1) 本名はアドルフ・ロズナー Adolph Rosner であり，1910年５月13日，ベルリンに生まれた。父のイグナーチイ・ロズネルはポーランドから亡命してきたユダヤ人の職人であり，母のローザは主婦だった。子どもが６人いた。アディ（アドルフの愛称）は４才からヴァイオリンを習い始め，1916年にはベルリンにあったユリウス・シュテルンの音楽院に入学し，1923

年までヴァイオリンを学んでいる。その後，ハンガリー出身のユダヤ系ヴァイオリニスト，フレッシュ・カーロイ（1873-1944）が教授を務めていた高等音楽学校に進み，18才で卒業するまで作曲と指揮も学んだ。卒業後の一時期，医者になろうと思い立ち，医大に行く準備もしたが，ちょうどヴァイオリンと同時にトランペットも吹き始めていて，すぐにジャズに夢中になり，ジャズ・ミュージシャンを目指すことになる。

1927年にはマイネッケ・シュトラーセにあったバー「マヤコフスキー」の舞台に立った。これがソ連との最初の繋がりと言えるだろう。翌年にはベルリンのさまざまなジャズ・バンドに加わり，トランペットのソリストとしてバーやカフェ，キャバレー，ボールルームで演奏した。その中でも有名だったのがマレク・ウェーバー Marek Weber（1888-1964）のオーケストラとシュテファン・ワイントラウプ Stefan Weintraub（1897-1981）の「ワイントラウプ・シンコペーターズ Weintraub Syncopators」である。シンコペーターズは流行の軽音楽をジャンルを問わず何でも演奏した。チャールストン，タンゴ，ラテン，オペレッタ，シャンソン，ジャズ，初期のスイング…，軽演劇やパントマイムなどのショーも織り交ぜ，聴衆のニーズに応えた。(2) 1919年にはフランスからベルリンに訪れたジョセフィン・ベーカー（1906-1975）とも共演し，センセーションを巻き起こした。リーダーのワイントラウプはピアノを演奏していたが，さらに優秀なピアニストで作曲家のフルードリッヒ・ホレンダー Friedrich Hollaender（1896-1976）がメンバーに加わると自らはドラム奏者に転向し，バンドのまとめ役に専念した。映画にも関わり，ジョセフ・フォン・スタンバーク監督，マレーネ・ディートリッヒ主演の映画『嘆きの天使』（1930）ではホレンダーが曲「Falling In Love Again」を提供し，バンドも演奏した。

アディ・ロズナーがワイントラウプ・シンコペーターズに加わったのは1929年からである。シンコペーターズは欧米諸国を意欲的に巡業した。ハンブルグとニューヨークの間を結ぶ定期航路の客船でも演奏した。こうして欧米のジャズ・ミュージシャンとも交流を重ねて，演奏の腕を上げていった。その中でもロズナーが1933年にニューヨークでルイ・アームストロング（1901-1971）に会ったという説や1932年だったという説，いやミラノで会ったという説もある。(3)

もっとも信憑性が高いのは，1934年11月13日，ヨーロッパ巡業をしていたアームストロングがブリュッセルでのコンサートの後，いくつのかクラブを訪れた際，たまたまロズナーの演奏を聴いて感動し，翌日滞在中のホテルにロズナーを招待し，二人は親しくなったという説である。この時の写真にアームストロングは「白いルイ・アームストロングから黒いエディ・ロズナーへ」と書いたという。(4) ともあれロズナーは，ドイツ・ジャズの黎明史に名前を残すことになった。

ドイツからポーランドへ

1933年ヒトラーのナチス・ドイツに脅威を感じたユダヤ人のロズナーはドイツを逃れ，ベルギー，チューリッヒ，プラハを経て，1934年の終わりにはワルシャワにたどり着く。ポーランドの諸都市ではレストランやキャバレーで多くのジャズ・ミュージシャンたちが活躍していた。中でも作曲家のユーリー（イェジィ）・ベリザツキー（1909-1963）はロズナーとは旧知の中で，新しいオーケストラを創りたいと申し出たロズナーにすぐに応えてくれた。サックスとクラリネットの管楽器奏者３名，リズム・セクション３名を基盤にトロンボーン，ギター，第２トランペットで構成されたバンドはたちまち頭角を現し，女性ヴォーカルを加えて，「オール・オブ・ミー All of Me」，「身も心も Body and Soul」「優しい嘘 Little White Lies」「昼も夜も Night and Day」「スターダスト Stardust」等，当時流行していたアメリカのジャズのスタンダード曲を演奏して，すぐに聴衆の支持を得た。このバンドはワルシャワ，クラクフ，ウッチなどポーランド諸都市で演奏し，パリ，モンテカルロ，アムステルダム，ラトヴィア，スカンジナビア諸国も巡業した。(5) パリではコロンビア・レコードのために「キャラバン Caravan」や「真夜中のハーレム Midnight in Harlem」等をレコーディングしている。(6) こうしてロズナーはポーランド・ジャズ史にも名を残すことになった。

ロズナーはナチス・ドイツを連想させる自らの本名アドルフを名乗ることを止め，ポーランド系ユダヤ人，エディ・ロズナーとしてステージに立つように

なる。ワルシャワではユダヤ人の女優・演出家で，1965年にはカンヌ国際映画祭で特別表彰されることになるイダ・カミンスカ（1899-1980）と知り合い，彼女の娘で歌手のルトゥ・カミンスカ（1919-2005）と結婚する。幸福の絶頂にあるかと思われたが，ナチス・ドイツはポーランドを侵し始めていた。1939年９月１日ドイツ軍はポーランドに侵攻した。第二次世界大戦の始まりである。ロズナーは家族やバンド仲間たちと共にすでにポーランドを脱出していた。行き先はポーランド北東部にある町ビャウィストクであった。ビャウィストクは独ソ戦開始当時，ソ連占領下にあり，町の名前もロシア語でベロストークと呼ばれていた。そしてたどり着いたのがかつてのポーランド領リヴィウ，現在はウクライナのルヴフで，ロズナーたちが一時滞在したのはソ連時代のリヴォフである。このリヴォフでロズナーが音楽活動を再開するやいなや，ヨーロッパ・スタイルのスウィング・ジャズのトップとしてたちまちソ連中でロズナーの名前が広まった。そこに目をつけたのが，ベロルシア・ソビエト社会主義共和国の共産党第一書記パンテレイモン・ポノマレンコ（1902-1984）だった。

栄光の日々

熱狂的なジャズ・ファンだったポノマレンコはミンスクでのロズナーのコンサートの後，楽屋に訪れ，彼にベロルシア･ソビエト社会主義共和国･国立ジャズ・オーケストラの創設を提案する。ロズナーに断る理由はなかった。かくして，エディ・ロズナーはソ連を代表するミュージシャン「エディ・ロズネル」になったのである。

ソ連における栄光の日々が始まった。ベロルシア（現ベラルーシ共和国）で，ロズネルは年間10万ルーブルの報酬を得た。妻のルトゥのコンサートは多い時で一ヶ月に16回あり，一回あたりの報酬は500ルーブルだった。当時の普通の労働者の年収が平均1500ルーブルだったのだから，破格の待遇だったことが分かる。1940年にはクレムリン向かいのモスクワ・ホテルにロズネルのために４部屋があてがわれ，グランド・ピアノも置かれていた。(7) 1940年９月にはソチでスターリンただ一人のためのコンサートを行い，彼からも気に入られる。第

二次大戦中，ロズネルはこのような好待遇でソ連各地を巡業して回った。ロシア語はほとんど理解できなかったが，日常的に通訳も付いたので，演奏には何も支障はなかった。ロシア人歌手がロシア語で歌っても，演奏自体には何も影響はない。前線や銃後で戦うソ連市民にも，市民を犠牲にし続ける国家上層部や役人たちにも，ジャズは分かりやすい，躍ることのできる，明るい音楽だった。ロズネルのバンドだけでなく，ウチョーソフやツファスマン，ヴァルラーモフといった，この時代を代表する音楽家たちの指揮するジャズ・オーケストラが，戦時下のソ連中で演奏し，人気を博していた。

ロズネルのオーケストラは1944年には175回，1945年には229回のコンサートを行っている。[(8)] さらに，戦時下にあってもロズネルは多くのレコーディングを残している。1944年に13曲，1945年に16曲もある。その中には歴史的な名演として世界中で評価の高い「セントルイス・ブルース St. Louis Blues」（1944）や「キャラバン Caravan」（1944）もある。さらに、歌詞のある歌はいずれも陽気なものばかりだ。その中でも「マンドリン，ギター，ベース」（1944）は最も有名な曲のひとつだろう。これが前線で演奏され，兵士たちが歌っていたとは信じられないほどである。

毎夕　仕事から帰ると
３人の愛すべき陽気な奴らが
自分の庭に楽譜を並べて
親しい人たちや友人たちを楽しませていた

この世の苦労をすっかり忘れ
楡の木の下　草の上に座って
君たち　本当にジャズほどいい響きのものはないね
マンドリン，ギター，ベース！

そうそう　そうそう　なんというジャズ
マンドリン，ギター，ベース！

彼らを聴きに隣人たちが集まってきた
子どもたちがみんな一緒に走ってきた
家族をおおぜい連れて
掃除夫までがちょくちょくお客にきた

スズメたちがみんな枝にとまった――
古い楡の木にいったいどれだけがとまれたのか――
はっきり言って　みんなに大好評
マンドリン，ギター，ベース！

そうそう　みんなに大好評
マンドリン，ギター，ベース！

花のバルコニーにはいつも
ある女性の顔が見えた
闇の中　瞳を輝かせ
愁いに満ちて　じっと月を見ていた

風のように彼女をじっと見て
そのとき小さなジャズは思った
「ああ　お隣さんは僕たちのうちの誰かに惚れたんだ――
マンドリンを？　ギターを？　それともベースを？

僕たちのうちの誰を？　誰を？――
マンドリン，ギター，それともベース？

それから彼らには決まり事になった
毎日　演奏する前に

彼らはバルコニーに視線を向けた
「あの娘なしで果たして始めていいものか？」

そして奇蹟の瞬間　彼女へと飛んでいった
それぞれの音を妬みながら，——
３人の両眼がバルコニーにじっと向けられた
マンドリン，ギター，ベース！

そうそう　そうそう　６つの目
マンドリン，ギター，ベース！

時は過ぎたが　友人たちはみんな分からなかった
お隣さんに選ばれたのは彼らのうちの誰なのか
彼らはたくさん議論し　期待した
「３人のことを好きなんじゃないか？」

たくさん議論した——ちょっと分かったのは
お隣さんが突然視界から消えたこと
そして２度とバルコニーに出てくることはなかった
マンドリン，ギター，ベース！

そうそう　そうそう　２度と
マンドリン，ギター，ベース！

実はお隣さんが愛していたのは
彼女が心から愛していたのは
遠征から帰ってきた
隣人の赤海軍水兵ダニイール

そして友人たちは死ぬまで誓った
楡の木の下にはもう決して座らないと！
そしてみんなから忘れさられて　そこに置かれているのは
マンドリン，ギター，ベース！

そうそう　いま置かれているのは
マンドリン，ギター，ベース！(9)

1945年５月２日，ベルリンが陥落。５月９日，ソ連人は戦勝記念日を迎え，国中が歓喜に湧いた。ウチョーソフの国立ロシア・ジャズ・オーケストラは巨大なスヴェルドロフ広場で大観衆を前に演奏した。他の著名なジャズ・グループも次々に日常に復帰したが，戦時中に人々に喜ばれた音楽――ジャズだけでなく，フォクストロット，ワルツ，タンゴ等の躍りやすいリズムにのせてつくられた1930-1940年代の歌謡曲，軽音楽はすべて「エストラーダ」の音楽とみなされた――をレパートリーとして豊富に用意して，聴衆のニーズに応え続けた。

出演する場所も増えた。モスクワのレストラン「メトロポリ」では，昼間はシンフォニー・オーケストラが演奏し，午後５時以降は毎晩さまざまなジャズのアンサンブルが出演し，市民の人気の場所となった。(10) レニングラードや各地の地方都市でもジャズが盛んに演奏されたが，特にエストニアのタリンとラトヴィアのリガにはすぐれたミュージシャンが多数いた。

ラーゲリの中のジャズ

戦後ますます花盛りになるかと思われたジャズだが，すでに衰退の足音が近づいていた。1945年５月24日と1946年２月９日，スターリンは２回の演説で新たな文化政策を打ち出し，西側の資本主義を敵とみなしたのである。すぐに中央委員会書記のアンドレイ・ジダーノフが文化・芸術のあらゆる分野を攻撃し始める。いわゆる「ジダーノフ批判」である。まずパステルナーク，アフマー

トワ，ゾーシチェンコ等の詩人や作家たちが槍玉にあげられ，やがてプロコーフィエフ，ショスタコーヴィチ，ハチャトゥリャーン等の音楽家たちも批判にさらされた。あらゆるものが「形式主義」「コスモポリタニズム」の名のもとに糾弾された。[11]

もちろんジャズも例外ではなかった。1946年９月６日の「ソビエト芸術」に掲載された論文「ウチョーソフのジャズについて」でヴィクトル・シクロフスキーはウチョーソフの才能を高く評価しながらも，最終的にはウチョーソフのジャズが古きよきエストラーダを歪めてしまったと批判し，こう結論づけたのである。「レオニード・ウチョーソフには歌の探求に注意を向けさせ，歌のドラマ化を抛棄する方がいい。エストラーダはエストラーダのままでいるべきだ。〔…〕ウチョーソフは実際，歌とともに人生を歩んでいる。若さは通り過ぎ――才能は消えた。〔…〕ウチョーソフは詩的である必要がある。」[12]これ以降「ジャズ」は「コスモポリタニズム」の代名詞であるかのように，批判されはじめる。「ジャズ」をグループの名に掲げるオーケストラやアンサンブルは自分たちが「エストラーダ」のグループであると主張することで生き延びようとした。例えば，ウチョーソフも国立ロシア・ジャズ・オーケストラの名称を1948年には国立ロシア・エストラーダ・オーケストラに改称したばかりでなく，ジャズの特徴とも言える管楽器（トロンボーン，サックス，クラリネット等）やリズム・セクションもなくし，歌謡中心のプログラムに切り替えざるを得なかった。[13]

「今日ジャズを演奏する者は，明日すべての国を売り渡す」「サキソフォーンからナイフまでは一歩だ」というスローガンが1946年には巷に広まった。[14]
1949年にはサックスは完全に禁止された。サックスの発明者がドイツ人のルドルフ・サックスであり，ジャズを代表する楽器だったからである。ほとんどのサックスが回収され，全部燃やされた。サックス奏者は他の楽器に転向するよう要求された。

音楽家たちが次々と逮捕され，ラーゲリに送られた。ロズネルも例外ではなかった。1946年８月14日の「イズベスチヤ」に「エストラーダにおける低俗さ」という記事が掲載され，ロズネルの音楽は西側のジャズばかりで，良質なソビエトの歌がないと批判された。この結果，ロズネルは自分のオーケストラから

身をひかざるを得なくなった。オーケストラはベリザツキーが後を引き継ぎ，かろうじて活動を続けたが，1947年８月１日に活動を停止する。(15)

1946年12月９日，国家保安省に呼び出されたロズネルは取り調べを受け，その結果1947年７月７日，矯正労働収容所における10年間の労働の刑を言い渡される。同年10月26日にはハバロフスクへ護送された。かつて巡業で訪れ，演奏したこともあった町である。しかし，今度は劇場やレストランではなく，ラーゲリだった。当初ロズネルは工場建設の仕事などを担当させられていたが，すぐに転機が訪れる。昔ハバロフスクで知り合った音楽家がロズネルのことをよく憶えていて，彼が収容所にいることを知るに及んで，ロズネルを本来の仕事で貢献させるよう，収容所の関係者に嘆願したのである。娯楽に飢えている地方都市である。関係者の中にはジャズ・ファンが大勢いた。あの有名なトランペット奏者，ジャズマンを活かさないはずはなかった。ロズネルは音楽隊をつくるように命じられる。しかし，収容所ではプロのミュージシャンがなかなか見つからない。それでも，半分素人の若者を集めては楽器の演奏を教え込み，なんとか音楽隊を結成するまでに至った。そして，ついにシベリア各地を巡業するまでになるのである。巡業先はハバロフスクから半径640キロ圏内に及んだ。主にハバロフスクの内務省のクラブやドラマ劇場，ピオネールのキャンプばかりか他の収容所等でも演奏した。妻のルトゥと娘がリヴォフにいるという知らせはそんな最中に届いた。

1949年ロズネルに対する待遇はさらによくなる。ハバロフスク地域のコムソモーリスカヤ・ナ・アムールにある別の収容所における文化教育班長を命じられたのである。昼間は造船所での労働に携わり，夜は工場の文化会館で演奏した。地元の女性アントニーナと知り合い，結ばれ，子どもも生まれたが，彼女はいつの間にか町から去っていた。このころ妻と娘がカザフスタンにいることを知ったロズネルは国家保安省に嘆願書を送った。カザフスタン近くの別の収容所に移してほしいという願いだった。しかし，帰ってきた応えは，マガダンの収容所への異動だった。(16)

ハバロフスクでもコムソモーリスカヤ・ナ・アムールでも収容所の関係者の中にはジャズ・ファンが多く，そうした人々にロズネルは何かと支援された。

次に働くことになるマガダンのコルイマ収容所でもそうだった。ラーゲリの中でももっとも過酷だったコルイマ収容所には1952年７月に入所した。極東のラーゲリを統括していたアレクサンドル・デレベンコは体重100キロを越す妻と共にこのマガダンで貴族のような暮らしをしていた。彼は大のジャズ・ファンで，側近の薦めもあり，ロズネルをマグラグ（マガダン中央文化会館）で働かせることにした。[(17)]

マグラグのダンス監督で歌手のマリーナ・プロコーフィエワ＝ボイコはかつてドイツにいたことがあり，ドイツ語を話すことができた。ロシア語にまだ不慣れだったロズネルには救いの手だった。彼女の援助は惜しみなく，ロズネルはたちまち新たなオーケストラを創設し，多くのコンサートを実現した。新年の四半期には50回以上のコンサートをしている。マリーナももちろん一緒に歌った。彼女はやがてロズネルと結ばれることになる。（もちろん，これが原因で妻のルトゥはロズネルを許さず，別れた後，アメリカに移住する。）

コルイマの収容所には多くの音楽家がいて，やはり同じようにステージに立っていた。例えば，歌手のヴァジム・コージン（1903-1999）も1944年から1950年までコルイマの収容所にいたが，高名な歌手だったためにすぐに劇場での仕事が与えられ，市民よりも恵まれた生活をしていた。釈放後もコージンはマガダンに住んでいたので，おそらくロズネルのオーケストラでも歌ったことだろう。[(18)]

しかし，ロズネルが収容所やその他の場所で自分のオーケストラの指揮をしていたことは分かるのだが，実際にどのような演奏をしていたのだろうか。いくつの資料によると，戦時中と同じようなアメリカ的ジャズから陽気な軽音楽まで演奏していて，極東で多くの聴衆がそれを楽しんだという。おそらく今日残っている1940年代の録音とほぼ変わらなかったのだろう。興味深いのは，ラーゲリが決して閉鎖的な場所でなく，ラーゲリ間を音楽家たちが巡業し，それ以外にもさまざまな場で演奏することができたことであり，それを望む人々が多くいたということである。

そうした現場に遭遇した日本人音楽家がいた。日本のチェロ奏者の草分け的存在である井上頼豊（1912-1996）である。1934年から1943年まで新交響楽団

（現在のＮＨＫ交響楽団）に在団したあと従軍し，戦後ソ連で抑留生活を送り，1948年に帰国している。井上は昭和20年の敗戦後すぐにウラジオストクの収容所に収容された。最初は過酷な労働を強いられたが，ある日ソ連の将校が持って来たピアノ・アコーディオンを弾いたことがきっかけで，音楽に飢えていた将校たちの要望に応えて日常的に演奏するようになり，仕事も楽なものに変わっていった。さらに演劇と音楽ができる者が自然に集まって活動するようなった。ハバロフスク周辺に複数あった収容所の同様なグループがすべてウラジオストクに集められて，「沿海州楽劇団」が昭和22（1947）年につくられた。劇団は各地を巡業して，収容所や病院，その周辺の兵士や市民のために演奏したという。(19)

井上頼豊はこの抑留生活の中でさまざま音楽や音楽家と出会ったが，それらの記憶を日本への帰国後すぐに『シベリアの音楽生活』（1949年）に書いた。その中の一説に「ソ連のジャズ」がある。1947年夏，ウラジオストクのウスリー映画劇場専属のウスリー・ジャズバンドが，井上たちのいる収容所に来演した時の思い出である。総勢18人の音楽家による「ウラジオ収容所はじまって以来のジャズ演奏」のいくつかの演目を聞いているうちに井上はふと気づく。彼らのジャズは，アメリカのジャズというよりはむしろオーソドックスなシンフォニック・ジャズやクラシックの手法に近いということであった。それゆえアメリカのジャズを聞きなれた耳には，やや土くさく感じられたという。だが，井上はそれがかえってロシアらしいジャズなのだと考えた。

> 炯眼な読者はここで，ソ連のジャズバンドの演奏曲目が自国の民謡に重点をおいて組まれていることに氣がつかれたであろう。この点こそが，ソ連のジャズが他国のジャズとことなる大きな特徴である。もちろん世界的に著名な軽音楽やジャズの作品，たとえばフェスタとかセントルィス・ブルース，あるいはフォクストロット「ビール樽」，タンゴ「嫉妬」のようなものも演奏するが，それ以外のものはすべて自国民謡のジャズ的編曲ばかりである。このことはソ連のジャズをいたずらに頽廃的なものにおちいらせることからすくうと同時に，ソ連人の耳に親しい民謡をジャズ化してき

かせることによって，ソ連人をジャズにしたしませ，ジャズを愛させ，さらに，民族音楽の普及についても大きな役割をはたしているわけである。こうしたジャズの行きかたは，当然ジャズ編曲の上にも影響をもたらすわけで，その結果極端な不協和音などはあまり使用されず，また編曲の傾向も，シンフォニック・ジャズ的なものにすすみつつある。[20]

ここで合点がいくのは，ちょうどこのころのジャズがジダーノフ批判の影響から，アメリカ的なジャズの色合いを抑え，ロシアやソ連を意識したエストラーダ音楽へと移行していたということである。井上とほぼ同時期にハバロフスクにいたロズネルも上からの意向に沿って上記のような音楽を意識して曲を演奏していたと考えてもおかしくはないだろう。それでも曲の合間合間にロズネルの愛したアメリカのジャズを差し挟んで演奏しただろうし，聴衆も歓喜して聴いたに違いない。中央の統制から離れた極東だったがために，エストラーダという枠に囚われずに，ロズネルは比較的自由にジャズも演奏できたようだ。もっとも外部からの情報は遮断されていたので，同時代のアメリカで演奏され始めていたバップ･スタイルは知るはずもなく，依然としてスイング･ジャズに留まっていた。

帰還

1954年５月22日，ロズネルは釈放され，コルイマから無事に帰還する。しかし，ジャズをめぐる状況はかなり変化していた。スターリンの死後，西側の新しい音楽を密かに聞き，新しいジャズ（ビ・バップ）を演奏する若手ミュージシャンが登場し始めていた。若い聴衆たちにとって，ロズネルの音楽はすでに古くさいものになり始めていた。しかし，古いジャズ・ファンにとってロズネルはまだまだスターだった。彼の復帰を大勢の聴衆が歓迎した。ロズネルは復帰後も数奇な運命をたどることになるのだが，スターリン体制後のロズネルをはじめ様々なジャズマンたちの音楽人生については，また稿を改めて綴りたい。

註

⑴　ロズネルの伝記については以下の５つの文献，映像資料を主に参照した。

・Драгилёв Д. Эдди Рознер: ШМАЛЯЕМ ДЛАЗ, ХОРЕРА ЯСНА! Документальный роман. Нижний Новгород: ДЕКОН. 2011.

・Никитин А. Эдди Рознер. Джазмен из ГУЛАГа. *Российский джаз*. В 2-х т. Т. 1 / Под ред. К. Мошкова, А. Фильпиевой. –СПб.: Изд-во «Лань»: Изд-во «ПЛАНЕТА МУЗЫКИ», 2013. С.69-78.

・Басин Я. Эдди Рознер - Музыка и тьма. 1998. http://mb.s5x.org/yazib.org/yz010303.html （2016年11月17日閲覧）

・Pierre-Henry Salfati “Le Jazzman du goulag - la trompette de Staline“. 1999. 主にロシア語版を参照した。«Эдди Игнатьевич Рознер - Джазмен из ГУЛАГа» https://www.youtube.com/watch?v=XN2DYtXobbI（2016年11月1日閲覧）ＮＨＫ衛星第１で2001年に放映した時のタイトルは「あるジャズマンの生涯〜ナチス・スターリン体制に追われて」である。ピエール・アンリ・サルファティ監督はこの作品で2000年にエミー賞を受賞した。

・大竹信雄「ナチス，ドイツ，ソヴィエトにおける音楽の運命 ―― エディ・ロズナーを事例として」法学新報，中央大学法学会，第118巻，第５・６号。2011年。37-58頁。これは，ロズネルについてまとまって書かれた日本語による唯一の論文である。

⑵　1929年８月20日ベルリンにおける録音「Jericho」が残っているが，これは７人編成でリーダーのストラウプ（ドラム）の他全員が複数の楽器（トランペット，ヴァイオリン，トロンボーン，テナー・サックス，アルト・サックス，クラリネット，フルート，ピアノ，バンジョー，ギター）を持ち替えて演奏している。WEINSTRAUB SYNCOPATORS “Jericho”. Swinging Ballroom Berlin; Swing, Jazz & Sweet in Historischen Original Aufnahmen 1926-1943. EmArcy Records, 1999. (EMARCY 542 058-1~4)

⑶　Драгилёв Д. Там же. С.40.

⑷　Там же. С.42.

⑸　S. Frederick Starr, *Red and Hot ;The Fate of Jazz in the Soviet Union 1917-1980*. New York, Oxford.:Oxford University Press. 1983. pp.197.

⑹　Драгилёв Д. Там же. С.43-45.

⑺ S. Frederick Starr. *Ibid,* pp.198-199.

⑻ Никитин А. Там же. С.74.

⑼ МАНДОЛИНА, ГИТАРА И БАС
http://a-pesni.org/drugije/mandolina.htm （2016年11月11日閲覧）
アリベルト・ハリス（1911-1974）作曲，ユーリー・ツェトリン（1915-1916）作詞。録音は1944年9月16日。この２人による曲で同じ日に録音された「カウボーイの歌」も大ヒットした。２曲とも歌をうたっているのはユーリー・ブラゴフ，パーヴェル・ゴフマン，ルイ・マルコヴィチである。Джаз-оркестр Белорусской ССР под управлением Эдди Рознера. КАРАВАН (Антология Советского джаза). «Меллодия», 1988. (М60 48361 004)の Глеб Скороходов によるライナーノートおよび Джаз-оркестр Эдди Рознера. Мандолина, гитара и бас (Антология джаза). «Квадро-Диск», 2000. (VK CD 066-00 / RS 975)を参照した。

⑽ Баташев А.Н. Советский джаз. Исторический очерк. –М.: Музыка, 1972. С.101.

⑾ フランシス・マース『ロシア音楽史』森田稔・他訳，春秋社。2006年。498-511頁。

⑿ Шкловский В. О джазе Утесова / *Эстрада без парада: Сборник* /Сост. Баженова Т. П. –М.: Искусство, 1990. С.169-170.

⒀ Фейертаг В. Джаз на эстраде / *Увалова Е.Д.* (*Ответ. Ред.*) Русская советская эстрада. 1946-1977. –М.: Искусство, 1981. С.335.

⒁ Martin Lücke. The Postwar Campaign against Jazz in the USSR (1945-1953). Ed. by G. Pickhan, R. Ritter. *Jazz Behind the Iron Cutain*. Peter Lang GmbH; Internationaler Verlag der Wissenschaften, 2010. pp.92.

⒂ Никитин А. Там же. С.75-76.

⒃ Драгилёв Д. Там же. С.110-115.

⒄ S. Frederick Starr. *Ibid,* pp.225.

⒅ Драгилёв Д. Там же. С.116-118.

⒆ 井上頼豊『聞き書き　井上頼豊 ―― 音楽・時代・ひと』外山雄三・林光編，音楽之友社，1996年。103-112頁。

⒇ 井上頼豊『シベリアの音楽生活』，ナウカ社，1949年。95-100頁。